
先輩と僕

送り狗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

先輩と僕

【Nコード】

N8171X

【作者名】

送り狗

【あらすじ】

天然でふわふわしている先輩と、先輩のことなら誰にも負けない僕の何気ない日常会話。時折出てくる先輩と僕以外人達との日常会話もまたほのぼのとしていたり、笑えたり、一話が1分もかからず読めてしまう、ショートショートなお話です。

暇な僕（前書き）

女の子と2人っきりの部屋で僕は何をすればいいのだろうか？ 可愛
い先輩をからかうのか、空気に耐え切れずに助けを呼ぶのか。僕は
逃げ出さない。

なぜなら……先輩をからかうのは僕1人で十分だから！

暇な僕

どこかの高校の、どこかの部室で、先輩と僕のなにげない会話が始まる。

4時35分。もうすぐ5時になる。今、僕はとても暇だった。どれくらい暇なのか例えるなら、校長先生の挨拶くらい暇だ。

(はぁ……暇だ。何か面白いものはないかなー あっ、先輩発見！)

クルツと首を動かし部室の中を見回すと、僕のすぐ近くだけど、決して近くも遠くもない距離に先輩がいた。

今日も先輩は、お決まりのように本を読んでいる。

「ねえ先輩、バナナって10回言ってみてください」

「ん？ なんで？」

本を読んでいた先輩は、本から顔を上げると首を傾げている。

「いいから、きつと面白いですよ」

「そうかなー じゃあ、バナナバナナバナナ……バナナ。はい、言ったよ」

素直に言ってくれる先輩。可愛いです！

「先輩は？」

「バナナ！」

予想以上に可愛い先輩。これはもうからかつしかない。

「わーい 先輩バナナー！」

「なっ！？」

僕にそう言われると、自分の言い間違えに気がついたのか、先輩は顔が真っ赤になり慌てだした。

「や、やめなさい！ わたしはこれでも君の先輩なのよっ」

「えー 自分のことをバナナと言ってしまっ先輩には、どうにも説得力がありませんね」

僕が返した言葉のほうの説得力があったようで、先輩は押し黙ってしまう。

(わっ、ちょっとやり過ぎてしまったかな？)

「す、すみません。少し言葉がきつかったかもしれませんが」

僕は少し言いすぎてしまったと、先輩に謝った。

「せ、先輩？」

しばらく経っても返事が来ない。僕が心配を شدしたところ、先輩がようやく喋ってくれた。

「わ……………わたしは……………バナナじゃない……………
もん……………」

下を向いていた先輩はゆっくりと僕を見上げると、赤面した顔のまま僕にそう言った。先輩と一緒にいるといつも思っていたが、今日はいつにも増して思ってしまった。

(先輩可愛い　っ!!!!)

暇な僕（後書き）

一話完結のショートな話です。

感想など書いてくれると嬉しいです。

驚く先輩（前書き）

驚いた先輩と僕の話

驚く先輩

「きゃああああ　　！！！！」

僕と先輩しかいない部室。先輩はいつもどおり本を読み、僕は惰眠をむさぼる。そうして過ごしていた僕は先輩の悲鳴で目が覚めた。

「ぬうお！？　どっとうしたんですか先輩！？」

「くっ黒いものがっ！？　わたしの足元を黒いものがっ！！」

「黒いもの？　動いて黒いもの？　それってゴキ……………」その名前を言わないでっ！！」「……………」

僕が首をかしげながらその名前を口に出そうとすると、先輩が必死になって遮ってきた。

「黒いもの　例のあのヒトがあ！！　なんとかしてよ君。^{きみ}男の子でしょ！！」

「っ！？」

今日の先輩は混乱していた。混乱した先輩はそのまま訳の分からないことを口にします。

「例のあのヒトがいたっていう事は、ここにはもつと居るっていうわけで……………部費でホイホイを100個くらい買わないとお」

「せつ先輩！　そんなに置いたら足の踏み場もなくなりますよっ！

それに今居るのは一匹です。それさえ退治すればいいじゃないですか!？」

「その名前を言わないでっ!?!」

「名前言つてませんよ!?!」

しかし、怯えている先輩もまた可愛いが、いつものように明るい先輩が一番可愛い。

先輩を怯えさせるなんて……これは僕がゴキ……
『言わないでー!?!』……例のあのヒトを退治するしかない!

「先輩は廊下に出ていてください。ここは僕が何とかしますんで」

「わっ分かったあ……」

そう言うと、先輩は廊下に出ていく。扉が完全に閉まるのを確認すると僕は行動を開始する。

「先輩を怯えさせるヤツは僕が許さない。さて 覚悟するんだね」

それから僕は、『てやあ、はあっ』と、例のあのヒトに苦戦し、勝利する。

「先輩、もう危険がなくなりました。安心して入ってきてください」

「そっ?」

扉からチヨコンと顔を出した先輩は中を覗くと、そろそろと入ってくる。

「ほら見てください。ヤツはいなくなりましたよ」

僕は両手を広げて部屋が安心なのを先輩に見せる。その様子を見て、ホッと一安心した先輩の目に何か黒いものが写ったらしい。

「きゃああああ　　！！！！」

そうして本日2回目の、僕の戦争が始まった。

驚く先輩（後書き）

その後先輩は怯えてしまって、3日ほど部屋に寄り付かなくなってしまった。

えんぴつと僕（前書き）

えんぴつを語る僕と先輩のお話

えんぴつと僕

『カリカリカリカリ……カリカリカリ』

先輩と僕の、2人しかいない部室で、えんぴつが紙の上を滑る音しか聞こえてこない。

今日の授業でたつぷりと出されたレポート相手に格闘していたとき、左手に持ったえんぴつを見て、僕は唐突に思った。

「先輩、えんぴつって使ったことがありますか？」

窓枠に寝そべってひなたぼっこをしていた先輩は、僕の突然の質問にのんびりとした口調で答えてくれる。

「バカにしないでよ君。^{きみ}わたしはこれでも小学校6年生まで使っていたんだから！」

「小学校6年生までですかあ」

「先輩って、小学校6年生の頃から可愛かったんでしょね。あーあ、小学6年生の先輩が見たいなー」

僕がそう言ってしまったときにはもう遅く、先輩は熟れたトマトみたいに真っ赤になると、『そっそんなことなんもんっ』と、大変可愛らしかった。

実際のところ、僕は狙ってそう言ったのだけど。

「先輩。話は戻りますが、僕は今でもこうしてえんぴつを使っているわけですが、なぜだと思えますか？」

まだ顔が真っ赤のままの先輩に、僕は尋ねる。

「うえ？ えっえーと……わからないよ」

「そうですか……」

僕は先輩に分からないと言われたことが意外とショックだった。なんだらう？ この胸がズキズキする痛みは？

「まっまあ気を取り直して続きですが、僕はえんぴつが一番使いやすいと思うているんですよ」

「自分で削り、お好みの使いやすさにする事も出来る便利さ。芯の濃さや太さにも多様なバリエーションがあり、どんな場面でも活躍してくれること間違いなし！」

「そして極めつけは、小さくなったえんぴつの愛らしさ！ 小さくなってくると、そのえんぴつにも愛着が湧いてきますし、なんとなくキャップをつければ最後まで使えます！」

「まあ本当に小さくなってしまったえんぴつは、捨ててしまうのですが……」

「そして 捨てる時に物語が発生する！ 今まで使ってきたえんぴつを手放してしまうという罪悪感。しかし、新しくえんぴつ

を使ってしまいたいという好奇心。なんてえんぴつは罪な存在なん
でしょう！！」

「で、僕がえんぴつのことについて何を言いたいかと言うことです
が………えっあれっ先輩？先輩！？」

先輩は、僕が語るえんぴつ愛についていけずに、脱落したようでした。

えんぴつと僕（後書き）

せんぱ

いっ！！

カムバアアア

クッ！！！！

おしくらまんじゅうと先輩（前書き）

おしくらまんじゅうがしたい先輩と僕の話

おしくらまんじゅうと先輩

「…………おしくらまんじゅうがしたいなあー」

僕は部室でマンガを読んでいたとき、先輩が何の前触れもなくそう言っていた。

そんなわけで、思いつきり不意をつかれた僕は、「はいっ!？」と、素で返してしまう。

「なんて声を出しているの君。おしくらまんじゅうだよ、おしくらまんじゅう! きつと楽しいはずだよ」

「あーちょっと待って下さい。おしくらまんじゅうは分かりますし、楽しいのも分かります。でも　なんで今?」

「おしくらまんじゅうをしたことがあるの!？」

「????　何ですか先輩?」

先輩が何かを言ったようだが、早口でうまく聞き取れなかった。

「えっ?　いやあ…………それはそのお……………そっそう、昔を懐かしんでいたら、急にやってみたくなっただけだよ」

「いや先輩、今何か言いかけてませんでしたか?」

誤魔化そうとする先輩に追求してみる。

「何も言っていないっ!!」

「はいっそうですねっ!!」

誤魔化されました。

しかし……このように言ってなにか必死に誤魔化そうとする先輩。

しかし先輩！ 僕は見ていました。先輩がさっきまで読んでいた本の内容が青春モノで、その中におしくらまんじゅうが出てくることをっ！

「安心してください先輩っ！ 僕はさっきまで先輩が読んでいた本の内容に、おしくらまんじゅうが出てくることなんか誰にも言いませんからっ！」

「ああっ!?!」

先輩は顔を押さえながら、走って出て行ってしまいました。

おしくらまんじゅうと先輩（後書き）

この後先輩を捜しに言った僕は、先輩にポカポカと叩かれました・
・
・
・

自販機と僕（前書き）

自販機について語る僕と先輩の話

自販機と僕

僕と先輩がいつも部活をしている部室には、自販機がある。

部屋の作りはどこの文化部の部室とも変わらない。特別な場所に部室があるわけでも、無理を言って設置してもらっているわけでもない。

でもなぜか、自販機が部室についている。

その自販機は今でも機能している。というか、一日一回は業者が来て補充までしている。ごくろうさま。

自販機の中身も、お汁粉などオーソドックスなものから、今流行の炭酸飲料まで各種取り揃え。非情に充実した自販機である。

その自販機の需要はあるか？ ない。

その自販機を使っているのは、先輩か僕か、隣や同じ校舎で部活をしている生徒だけである。まったくもってお金の無駄使いだ。

でも、先輩と僕はかなり重宝しているので、大事に思っている。

一度先輩に聞いたことがある。なんで部室に自販機があるんですかって。

先輩は、

「わからない」

と、言っていた。そして、その後が続くように、

「わたしも昔気になって、一度先輩に聞いたことがあるんだけど、分からないんだって」

「わたしが聞いた先輩が言うには、その先輩も入学してすぐに先輩に聞いたらしいんだけど、分からないって。その先輩も、そのまた先輩も、そのまたまた先輩も知らないって聞いたよ」

「そしてわたしが思っていることなんだけど、この自販機にはすごい秘密が隠されていて、その秘密はきつと国家レベルで守られているんだよ！」

と、久しぶりに先輩が熱弁をふるっていた。僕は「そんなまさかあー」と言っていたが、もしそんな陰謀が隠されていたらどうしようと思ひ悩んだこともあったが、考えても仕方がないことに分類して思考を停止した。

しかし……僕が尊敬してやまない先輩は天然で、ちょっとふわふわしてみている危ないのだが、勘ばっかりはものすごく良く、本当に心配している。

まあ今日は独り言をべらべらと喋っていたが、何が言いたかったのかという、先輩は天然でふわふわしていて勘が良いということだ。

自販機と僕（後書き）

ちなみに僕と先輩がいる部室は、倒れてくる本棚で自販機が隠れているので、使用には注意が必要である

購買部戦争と先輩（前書き）

購買部戦争に挑む僕と先輩の話

購買部戦争と先輩

昼休み　　朝、お昼ご飯を作り忘れてきた僕は購買部に来ていた。

聞いた話だけれど、うちの高校の購買部はお昼休みは大変混雑すると聞いている。僕は今まで購買部に足を運んだことが無かったので、いい機会だ。その大変混雑するという購買部を見ようじゃないかっ！

なんて軽い気持ちできていた僕は、この高校の購買部での混雑するという言葉の意味の、スケールの違いに驚いた。

「うっわああ　　なんだこれ!？」

そこはまさに戦争とでも表現したほうが当てはまる場所だった。

我さきに弁当や菓子パンに群がる学生たち。押し合いで一步も動くことができない状況。何よりすごかったのがその熱気だった。

「押すな押すなっ」

「おばちゃん！　コレくれっ!」

「おいっコレは俺が先に目をつけたんだ!」

離れた場所に居る僕のところまで届く、その熱気と声。見ているだけで熱かった。

少し様子を見てみると、僕のクラスにいる熱血君がいた。熱血君はこういう熱い雰囲気大好きなので、欠かさず昼飯争奪戦に参加しているのだろう。その証拠に、手際よく菓子パンを手に入れてはお金を払っている。

「おつ君^{きみ}じゃないか！ 珍しいなこんなところにいるなんて！」

さすが熱血君というべきか、喋り方まで熱い。そんな熱血君はチラツと購買部の方を見ると、珍しく戸惑ったような表情をしていた。

「君^{きみ}がいるってことは弁当を忘れたってことか？ 俺の菓子パンを分けてやるから教室にいかないか？」

「いやいや。それは熱血君のお昼ご飯だし、僕が貰うのはなんか悪い。気にしないで、僕は自分で買ってくるから」

そういつて僕は購買部のほうに向き直り、気がついた。

『先輩が売り子をしている』

僕はそれを見た瞬間、購買部に駆け出した。後ろから『あーあ』と言う声が聞こえてきたが、気のせいだろう。

「とつっ！」

どうやってか僕でも分からないが、おしくらまんじゅう状態の最後尾から僕はジャンプして最前列に降り立つ。周りの人は驚いている様子だったが僕は気にしない。驚いている先輩に向かって僕はお金

を払おうと口を開く。

「先輩を1人下さい！」

「100万円になります」

「……………100回払いの、ローンで」

今日は部屋にいないときの先輩を見て、失ったものは大きいが、満足したことは伝えておく。

購買部戦争と先輩（後書き）

100万円はもちろん冗談だし、僕は先輩のエプロン姿を見て鼻血ものだったが、肝心なお昼ご飯を忘れていた。

泣く泣く帰ってきた僕は、熱血君やクラスの子からお弁当を少しずつ分けてもらいました。

窓と僕（前書き）

イタズラな先輩と窓と僕の話

窓と僕

いつもの部室。いつもの時間。今日も先輩と僕は部室で思い思いの時間を過ごしていた。

平和という言葉以外見つからないくらいほのぼのとした空間。そんな空間で、僕は異彩を放っていた。

教室に置いてある机をいくつも並べ、ゴロゴロと寝転がっている。先輩と僕の2人しかいないため、目立っているが気にならない。そんな絶賛怠惰中の僕に、先輩が声をかけてきた。

「寒いーっ!?!? 君、窓を閉めてくれない? 窓から入ってくる風が肌寒いから」

顔を上げて見れば、窓が開いており、まだ肌寒い季節だということも相まって、入ってくる風が冷たい。

「はい分かりました」

僕はそう言っただけで窓を閉める。

肌寒いこの季節、先輩に言われなくてもいはずれ気が付き窓を閉めたと思う。しかし、

(先輩に言われて気が付くなんて末代までの恥だ……次からは先輩に言われる前に気が付かないと!)

そう決意して3分後、先輩から声をかけられた。

「暑い…… 君、窓開けてくれない？　なんか暑くなってきたから」

エアコン完備の我が部室、窓を閉めたついでにエアコンを入れたのだ。ちなみに28度設定。

はい、と言って窓を開ける僕。そして、エアコンの電源を消し、窓を少し開ける。

肌寒い風を感じながら数分後、先輩から窓を閉めてと言われる。そして数分後、窓を開けてと言われる。しばらくこんな事を繰り返すと……

「あーっっ！？　君っ！！　嫌がらせされてるんだから気が付きなさいっ！？」

「なっなんだってええ！？」

手振り身振りのオーバーリアクションで驚くが　　知っていました。そんな事とつくに知っていましたよ、先輩！

先輩のお茶目なイタズラは逆に萌えると気が付かないと、どれだけの男が犠牲になるか分からない。

僕は目頭が熱くなるのを感じながら、肌寒い空に敬礼をした。

窓と僕（後書き）

この後、先輩に変なことを吹き込んだ人を探しに行くことにした
続く！

尋問と先輩（前書き）

尋問される先輩と僕

尋問と先輩

窓を閉め、カーテンを閉め、部屋の明かりを電球一個にした僕は、さらにカーテンの隙間から光が一切入らないようにガムテープを貼っていく。

そうして作り上げたほとんど闇の世界で、重々しく口を開き先輩に対して尋問を開始した。電球は僕と先輩の真上にあり、顔がわずかに見えるくらい。雰囲気は十分出ている。

さて、僕が尋問をする側、先輩が尋問をされる側。どうしてこのような流れになったのかと言うと、人をからかう事なんてしなれないと思っている先輩に好からぬことを吹き込み、先輩を悪の道へと走らせたことが理由だ。

「さて……先輩、先輩にこんなことを吹き込んだ人物を教えてください。その人に天罰が下りますから」

僕はニコニコ笑って尋問を開始した。

「ええーと……君、顔が怖いよ？ それと私は誰にも唆そされたりなんてしていないよ」

先輩は顔をこわばらせながらそう答えた。可哀想に先輩、そいつに言うなって脅されているんですね。

「安心してください先輩っ！ 俺は先輩が脅されて言えないってことは分かっていますから、話してくれても先輩を裏切ったり見捨て

たりするようなことはありません！ 安心して話してください、さあっ！」

僕は早口言葉のように言いたいことを言うと、先輩を見る。そんな僕の言葉を聞いて先輩は困惑した様子で辺りを見渡し始め、やがて僕を見ると口を開いた。

「本当に唆されたわけじゃないって」

「先輩、いい加減僕に本当のことを話してください！」

「いや、だからね」

「先輩っ！！」

「あーもうっ！」

「!?!」

先輩は勢いよく立ち上がると、扉に向かって全力ダッシュ。『ベー』と赤い舌を出して、どこかへ行ってしまった。僕は突然の出来事にしばらく呆けていたが、何が起こったか理解すると急いで扉に向かい先輩と先輩を唆した人物を探すために走り出した。

尋問と先輩（後書き）

先輩探しを第一に、先輩を唆した人物を探しに校内を探索することになった。

調理部と僕（前書き）

調理部と僕の話

調理部と僕

「せーんーぱーいー！！ どこですかー？ または先輩を唆した人物、出てこないと痛い目に会うぞ！！」

僕はそんなことを少しも恥ずかしいと感じる事もなく、大声で叫びながら廊下を歩いていった。

僕のそんな様子を何事かと思い、教室から出てきた野次馬どもがいたが、そんなもの僕と先輩の固い絆の前にはタワシも同然だった。タワシがこちらを見ている。それが何だというのだろう。

しかし、思う。出てきてと言って素直に出てくる人間なんているのだろうか？ ましてや自分が危機に瀕していると言うのに、出てくる阿呆はいないと思う。

そうなつてくると困ったことがある。さて、どうやって捜したらいいのだろうか？ しばらく考えていた僕は、あることを閃いた。

「そうだ！ 先輩の大好物はプリンじゃないか！？」

思い立ったが吉日。そんな明言があるくらい、行動するって大事じゃないかっ！？ では、モノで釣るといふ作戦を決行！

僕は素早く調理室の場所を頭の中に思い浮かべると、ズンズンと足音を響かせるように歩き出した。先輩の大好物は手作りに限る。今まで作ってきた中で、どれが一番美味しいと言っていたのかを思い出して作ることにした。

調理室についた僕はまず、調理室の中を確認。

（ほう、調理部員が1人、2人、3人　全員で7人か……　多
くないけど少なくとも無いな）

そしてちょうどいいタイミングな事に、今日はプリンを作るようだった。

「では皆さん、材料の準備は出来ましたか？」

「はい先生！　僕の分の道具と材料がありません！」

「えっ！？　あっそれはすみません……ええーと、あなたのお名前
はなんでしたっけ？」

「いやだなーもう先生、僕の名前は君ですよ？　忘れたんですか？」

「あつすいません。今思い出しました。君さんでしたね」

「はいーいそうですー！」

エプロンは常に持ち歩いている。常備しているエプロンをつけて、
僕は何気ない顔で調理部員に成りすました。

調理部と僕（後書き）

先輩の大好物は焼きプリン。

しかし！！ 隣を見れば、カスタードプリンの材料じゃないかつ！
？ 目を盗んで、焼プリンを作れるのか！？

調理部と僕 につ

先生が僕にプリンの材料を渡し終わると、先生は僕と調理部員のほうを向いて話を始めた。

「では、黒板に書かれている作り方を元にプリンを作ってください。先生は職員室に戻りますので、最後に調理室を出る人は千錠せんじょうをして職員室に鍵を返しに来て下さい」

「はい！」

調理部の部長だろう女の子が返事をする、先生は職員室に行ってしまった。

「うーん。話がうまく進んでいくなあ……」

どうやって先生の目を盗んでプリンを作るのかと考えていたところ、先生はちょうどいいタイミングで職員室に行くという。しかも、話を聞いた限りではもう戻って来ることもない。それに、調理部員の皆さんは僕に気がついて気がつかない振り。ようは気になっではないが声を掛けられない、そんな状態だ。

何だか話がうまく進みすぎている。少々嫌な予感もしたが、僕は気にすることなく焼きプリン作りを開始した。

「材料は揃ったから道具を取ってきてプリンを作るか……」

『カカカカツ』つと、卵を混ぜながら次の作業に移っていく。僕の手際はそれはもう素晴らしかったに違いない。今まで声を掛けてこなかった調理部員の人と話しかけてきた。

「あつあのお……」

「ん？ なに？」

「黒板に書いてある作り方を見ても、うまく出来ないんですけど……」

「えっ？ ああカラメルソース？ あれはねえ焦げないようにする為には、中火でいっきに混ぜてしまった方がいいんだよ」

「そうなんですか？ ありがとうございます！ 試してみます！」

一人にアドバイスをおくって緊張がようやく解けてきたんだろう。話しかけてきた人以外の調理部員の人たちが話しかけてきた。その中には調理部の部長だろうと思う人もいた。

「プリン作るのうまいんですね！」

「うんまあそうだね。僕には食べさせてあげたい人がいるからね。想う気持ちってすごいんだよ、おかげでプリンもそれ以外もすぐにうまく作れるようになったし」

「想う気持ちですか？」

「そう！ 想う気持ち！ 今作っているプリンだって先輩をモノで釣るため……いや、あげようと思って作っているわけだしね！」

「好きなんですか……その先輩のこと？」

「うん好き好き、大好きだよ！ なんとって先輩は可愛いしね！
それに……僕は先輩にはとてもお世話になったしね……」

僕は先輩が好き嫌いと言ったら、という質問だと思って好きだと答えたのだが、なぜか調理部員の人たちは、『キヤーキヤー』と言って、話を最後まで聞いていなかった。だから僕が小さい声で言った言葉は、調理部員の人たちには聞こえていなかった。

調理部と僕 につ (後書き)

メモ：調理部は今年出来たばかりの部活で、部長は一年、部員も一年で構成された部活動です。

二年生の君は声^{きみ}が掛けにくかったんでしょね。

調理部と僕 さん

さて プリン完成までもうわずかだね。今までしていた会話を止めて、終わりに近づいたプリン作りに意識を集中することにした。

調理部員の人たちと会話をしながらも、手を休めることなく動かし続けていた僕はプリンを焼くだけになっていた。普通のプリンも焼プリンも焼くのだが、僕が作る焼プリンはちよつと違う。普通の焼プリンよりもわざと全体を焦がしているのだ。

時間が無いときは市販のものと同じように焼きごてで焦げ目をつけるが、時間があるときには僕が考え出した焼き方で、オーブンで焦げ目をつける。オーブンで焦げ目をつけることで、市販のものには無い美味しさがあるのだ。

容器にプリンの液を流し入れ、オーブンに入れて時間をセット。ようやく焼き始める。

（焼プリンは焼き終わるまでに時間がかかることが唯一の問題なんだけどね……あっ！？ 焼き終わるころって先輩居ないかもしれないじゃん！？）

「しまったあ！？ プリンを作ること頭がいっぱいで、先輩を捜しているってことをすっかり忘れてたあ！！ しかも、焼き上がる時間をまったく考えていなかったし！？」

「！？ えっどうしたんですか！？」

「あついやごつちの話」

（しかしどうしたものか？ これ以上プリン作りに時間を割けないぞ……よし！）

「ねえ君たち、僕が今オーブンの中に入れているプリンなんだけど、時間がきたらタイマーが鳴るから、そうしたらここに居る人たちで分けて食べてくれないかな？」

「……いいんですか？」

「いいのいいの！ 僕はこれから忙しいからここには戻ってこれないと思うんだ。だったら、ここに居る人たちで食べてもらえたほうがいいと思ってね」

「分かりました！ じゃあいただきます！」

「うん。礼儀正しくていいね」

僕はそう言うと、嵌めていたエプロンを脱いで制服のポケットに入れる。そして廊下に飛び出して走り出した。脇道にそれちゃったけど、本題の先輩捜しを再開した。

調理部と僕　さん（後書き）

職員室に鍵を返しに来るのが遅いため先生が心配して調理部を見に来たところ、調理部員の人たちが君きみの作ったプリンを囲んでおり、先生は君が作ったプリンを食べて感動したそう。

その後しばらく、指名手配犯のように掲示板に『君きみを捜しています』という張り紙がされていたそうです。

月刊ピエロと先輩（前書き）

部室を飛び出した先輩のお話

月刊ピエロと先輩

特に理由はなかったが、私は思わず逃げ出した。

私の後輩である君は少々思い込みが激しいところがある。今回の出来事は誰かに唆されてやったんだろうと信じて疑わない。

あの子は優しいのだが、その優しさが変な方向に働いたために話の食い違いが起こってしまった。唆されてはいないと説明しようにも、まず話を聞いて貰えなかったから今回はさらに手に終えない。

「なんと云ったら納得してくれるのかな？」

私はそう呟きながら3年生の廊下を歩く。廊下に備え付けてある時計で時間を確認すれば、4時35分。もうすぐ5時になる。

「もうそんな時間なのかー」

私はまた独り言を言いながら廊下を歩いていく。特に理由もなく飛び出して来てしまったが、これが良かったのかもしれない。私は何か良い言い訳が思いつくかもしれないし、君が考えを改めてくれるかもしれない。

(君には絶対に……昨日読んでいたマンガに描写されていたことを真似したら、同じ様な事が起こるかななんて理由で試したなんて事を悟られないようにしないと……)

昨日読んでいたマンガ。月刊ピエロは、主に少女マンガしか載っていない。しかも、高校生の恋愛モノが多いため、一部読者からは高

い支持を得ている。そんな月刊ピエロのあるひとつのシーンがどうしても気になってしまい、試してしまったのだ。

そんな事は口が裂けても、君には言えなかった。

しばらく歩いていると私の教室に来たが誰もいない。いつもならこんな時間でも、結構な人数が残っているはずなんだけど……

「……おかしいなあ。今日の君といい、今日のみんなの態度といい、私に内緒で何かやってるのかな？」

君いわく、私の勘は良く当たるらしい。確かに、埋蔵金を見つけたり温泉を見つかったりとしたが、特におかしなことだとは思わない。だって、私の家族は私よりももっとすごいんだから。

そして、私はくるつと振り返りもと来た道を戻り始めた。なぜか戻らないといけない気がしたけれど、私にはよく分からない感覚だった。戻り始めてしばらくして、私は空き教室の一つに入った。

空き教室には私のクラスの人たちが全員集合していた。

月刊ピエロと先輩（後書き）

メモ：月刊ピエロは毎月20日発売の、大人気雑誌。先輩も数年前からのかなりの愛読者の様子。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8171x/>

先輩と僕

2011年12月11日15時11分発行